診療室

# 小　動　物　医　療　の　提　言

周藤行則[†]（すとう動物病院院長・千葉県獣医師会）

動物病院を開院して28年が過ぎた.「光陰矢の如し」を痛感している．私の両親は教職者で，兄姉達は真面目で優秀であった．末子の私は学業そっちのけで自由気儘な毎日を過ごしていた．私が獣医師になる契機は，父親の「困っている動物達を助けてやれ」の遺言だった．多くの恩師のお力添えがあり紆余曲折の末小動物診療に従事している.

彼岸の事はさておき，小動物診療で実現させたい夢がある．㈳日本獣医師会による血液バンク制度設立と献血・供血制度の確立である．外科系診療主体であった私が，2011年東京大学農学生命科学研究科獣医内科学教室の辻本　元教授の下，1年間血液・腫瘍科に在籍し学ばせていただいた．それを契機に教員の先生方と懇意になり，血液・腫瘍疾患に興味を持つようになった．血液・腫瘍疾患診療も迅速な診断と適切な治療が望まれるのは当然ながら，補完的輸血治療が必要不可欠な症例が多数存在する．重度貧血症例に骨髄検査を実施する場合，治療開始後の貧血改善が遅い場合等，症例の安全性やQOL確保のため補完的輸血治療が必要である．それまでの私の認識が甘く，内科系疾患でこそ輸血が必要だと思い知らされた.

しかしながら諸外国とは異なり日本には動物血液バンクは存在しない．あくまでも開業動物病院の個人的努力で輸血治療が行われているに過ぎない．これでは第二次世界大戦当時の日本の石油事情ぐらい貴重である.「石油の一滴は血の一滴」と言われていた.「じゃあ犬猫の血の一滴はどうなんだ！」と個人的怒りは置いておいて，現状，日本の小動物診療における輸血治療の問題点を列挙すると①新規動物病院開業者は献血ボランティアを集めにくい，②献血ボランティアは贔屓の個人動物病院と繋がり他の動物病院には協力しない，③成分輸血を行う場合，設備投資費用が必要だがグループ動物病院でないと採算が合わない，④赤血球製剤の保存期間は冷蔵で最大せいぜい3週間と短い，それ以降，廃棄処分が必要で，小規模動物病院ごとの成分輸血は非効率的である，⑤稀な血液型猫を確保するのは大変困難である．つまり生物学的製剤として薬品扱いされながら安定供給が望めなく全く薬品の体をなしていない.

㈳千葉県獣医師会には輸血・献血事業の先駆者である杉山芳樹先生達がいらっしゃる．私如き凡人が思いつくはるか以前に輸血献血事業を実践されたことを後で知り，改めて先輩方の偉大さを思い知らされた．杉山先生達は献血犬確保に尽力されたが，諸般の事情で献血ボランティアの確保・維持が困難であったこと，「血液バンク」の名称使用に農林水産省から薬事法に抵触する旨クレームがあったと承っている．これらの問題打開策として，日本獣医師会による血液バンク設立を提言する．多数の輸血を必要とする飼い主様達へ，多数の善意ある飼い主様達から頂戴した動物血液を仲介し治療することは立派な社会貢献で，日本獣医師会公益事業の大きな柱となると考える．また献血ボランティアの皆様と獣医師会会員間を日本獣医師会が仲介することで，飼い主様達の贔屓感情に配慮し，日本獣医師会小動物全会員へ公平かつ円滑な血液供給が可能となる．全国の小動物獣医師会会員を対象とするので設備投資をしても効率的運用が可能となる．多数の動物病院の利用により頂戴した血液の廃棄も減少させることが可能である．結果，小動物診療における血液疾患治療症例数は飛躍的に増加し，国内の獣医輸血診療水準の向上が図られる．現実的問題として動物血液の需供バランスの均衡を図るには相当多数の「愛犬家・愛猫家の良き理解者」と献血犬猫達が必要となる．そして「理解者」と共に協力ネットワークを構築することが重要である．新鮮血液を必要に応じて採血し

**周藤行則**

—略　歴—

1980年　鳥取大学卒業
同　　年　鳥取県米子家畜保健衛生所勤務
1983年　同退職
1984年　東京大学農学部家畜外科学教室研究生
1986年　同修了
1987年　すとう動物病院開院
　　現在に至る

† 連絡責任者：周藤行則（すとう動物病院院長）
〒279-0041　浦安市堀江2-29-8　☎047-354-0105　E-mail : yusutovet@catnet.ne.jp

供給する方が治療効果を高めることは明白である．いざ緊急に血液を必要とする場合に備えて事前に血液型を判定し，必要に応じて迅速な血液供給を行える体制作りが望まれる．現行法では，献血に伴う金銭の授受は認められない．せっかく飼い主様に協力していただくのだから，犬猫の定期健康診断，感染症診断，治療等を無償もしくは少なくとも 1/2 以上を獣医師会が負担する等の助成が可能なようにするか，あるいは法改正をぜひ行って欲しい．また，献血犬猫達は言わば自分達の命を分け与えるので人と同様「健康手帳」を発行し，長年協力した場合は功績を表彰する．献血ボランティアは日本獣医師会が国会議員を招待した大きな会場で表彰し，テレビ放送をする．社会貢献をアピールするには十分だと思われる．企業の賛同と協力を得てペットフード引換券を贈呈するか，できれば献血協力犬猫が高齢化し介護を必要とする場合の支援体制も備われば素晴らしい．これらの支援体制で役割を全うした犬猫達が，愛犬家・愛猫家のもとで幸せな余生を暮らせるような一体的取組を考えても良いのではないだろうか．

昨今国土交通省をはじめ農林水産省でも「社会実験・実証事業等」が行われている．各省庁によって特徴ある事業が行われている．私の提言する事業は縦割りの「社会実験・実証事業」とは異なるかもしれない．市民ネットワークによる地域活性化は，各省庁の「社会実験・実証事業」をまたぐような事業になるかもしれない．どう解釈し事業申請するかは公職部会の先生方にお願いしたい．

国からの資金援助が得られれば資金面は安心できる．最初は電話窓口を設けて斡旋事業から始めれば低コストで実現できる．運用が軌道に乗れば各県獣医師会でも公益事業として全国各獣医師会で実施すればよい．そこには新しい雇用が創造される．血液バンク設立のための生物学的製剤に関する法的解釈も公職の先生方に協力をお願いする．血液バンク設立実現のためには獣医師政治連盟の議員先生方のお力添えもいただく．設立後の実務面は小動物会員が携わる．運営面は公職部会の先生方にお願いする．各施設における学術指導者には各大学の血液・腫瘍科の先生方を招聘する．結果的に獣医師会会員と大学教員の新たなポストを創造できるし，血液疾患研究にふさわしい研究拠点を提供できる．その結果日本小動物界の血液疾患治療レベル向上が図れる．私の関心は，赤血球膜抗原だけでなく，人の HLA 抗原に相当する犬猫のリンパ球抗原を解明できればと夢想し，人並みに血液製剤の放射線照射まで実現できればと考えている．

もしもこれらの夢がかなった後で西方浄土へ往生すれば父親に自慢してやりたいが，きっと「人様の手柄を自慢するな」と言うことだろう．